

狂人日（鲁迅作品日文版）PDF转换可能丢失图片或格式，
建议阅读原文

[https://www.100test.com/kao_ti2020/245/2021_2022__E7_8B_82_E](https://www.100test.com/kao_ti2020/245/2021_2022__E7_8B_82_E4_BA_BA_E6_97_A5_E8_c105_245726.htm)

4_BA_BA_E6_97_A5_E8_c105_245726.htm 某君兄弟数人はいずれもわたしの中学代の友で、久しくれているうち便りも途えがちになった。先ふと大病（たいびょう）に罹（かか）った者があるという、故（こきょう）にる途中立寄ってみるとわずかに一人に会った。病に罹ったのはその人の弟で、君がせっかくねて来てくれたが、本人はもうスッカリ全快して官吏候となり某地へ赴任したとり、大笑いして二の日を出した。これをると当の病状がよくわかる。旧友君に献じてもいいというので、持ちって一してみると、病は迫害狂なので、がすこぶるこんがらがり、筋が通らず出目（でたらめ）が多い。日附（ひづけ）はいてないが墨色（すみいろ）も体も一でないところをると、一（じ）にいたものでないことが明らかで、々（まま）（れんらく）がついている。家がたらこれでも何かの役に立つかと思って、言のりは一文字もなおさず、事中の姓名だけを取えて一篇にまとめてみた。名は本人平後自らしたもので、そのまま用いた。七年四月二日しるす。一今夜は大月の色がいい。乃公（おれ）は三十年あまりもこれをずにいたんだが、今夜ると分が殊（こと）の外（ほか）サッパリして初めて知った、前の三十何年は全く中であつたことを。それにしても用心するに越したことはない。もし用心しないでいいのなら、あの家（ちょうけ）の犬めが何だつて乃公の眼をるのだらう。乃公が恐れる理（わけ）がある。二今夜はまるきり

月の光がい。乃公はどうもだと思って、早くからをつけてを出したが、翁（ちょうじいさん）の目付（めつき）がおかしいぞ。乃公を恐れているらしい。乃公をやっつけようと思っているらしい。ほかにまだ七八人もいるが、どれもこれもや耳を密著（くつつ）けて乃公のをしている。乃公にられるのを恐れている。往来の人は皆そんなだ。中にも薄味のい、最もあくどい奴は口をおッぴろげて笑っていやがる。乃公はの天（てっぺん）から足の爪先（つまさき）までひいやりとした。解った。彼らの手配がもうチャンと出来たんだ。乃公はびくともせずにいると、前の方で一群の子供がまた乃公のをしている。目付は翁と酷似（そっくり）で、色は皆青（てっせい）だ。一体乃公は何だってこんな子供から怨みを受けているのだろうか。とてもたまったものじゃない。大声あげて「お前は乃公にわけを言え」と怒ってやると彼らは一散に逃げ出した。乃公と翁とは何の怨みがあるのだろうか。往来の人にもまた何の怨みがあるのだろうか。そうだ。二十年前、古久（こきゅう）先生の古面（ふるちょうめん）を踏みしたことがある。あの古久先生は大不嫌であったが、翁と彼とは合（しりあ）いでないから、定めてあのを（ききつた）えて不平を引受け、往来の人までも乃公に怨みを抱くようになったのだろうか。だが子供等は一体どういうわけだえ。あの分にはまだ生れているはずがないのに、何だってな目付でじろじろるのだろうか。乃公を恐れているらしい。乃公をやっつけようと思っているらしい。本当に恐ろしいことだ。本当に痛ましいことだ。おお解った。これはてっきりあいつ等のお袋が教えた

んだ。三ーじゅう睡（ねむ）れない。何事も研究してみるとだんだん解って来る。彼等は——知（ちけん）に鞭打たれたことがある。土から手（はりで）を食（くら）ったことがある。小役人から（かかあ）を取られたことがある。また彼等のが金からとっちめられて理死（むりじに）をさせられたことがある。そのの色でもきのうのようなあんな凄いいことはない。最も奇怪に感じるのは、きのう往来で逢ったあの女だ。彼女は子供をたたいてじっとわたしを（みつ）めている。「叔（おじ）さん、わたしゃお前に二つ三つ咬（か）みついてやらなければがまない」これにはわたしも全くおどかさされてしまったが、あの牙ムキ出しの青ッ面（つら）が何だかしらんが皆笑い出した。すると老五（ちんろうご）がつかつかんで来て、わたしをふんづかまえて家（うち）へれて行った。家（うち）の者はわたしをても知らん振りしてに入ると（かぎ）をけ、まるで（とりがも）のようにわれているが、このことはどうしてもわたしの腑に落ちない。四五日前に狼村（おおかみむら）の小作人が不を告げに来た。彼はわたしの大（おお）アニキとをしていた。村に一人の大人（だいあくにん）があって寄ってたかって打（うちころ）してしまったが、中には彼の心をえぐり出し、油煎（あぶらい）りにして食べた者がある。そうすると肝が太くなるというだ。わたしは一言（ひとこと）差出口（さしでぐち）をすると、小作人と大アニキはじろりとわたしをた。その目付がきのう逢った人の目付に寸分いのないことを今知った。思い出してもぞっとする。彼等は人を食い（な）れているのだからわたしを食わな

いとも限らない。たまえ。……あの女がお前に咬みついてやると言ったのも、大の牙ムキ出しの青面（あおつら）の笑も、先日の小作人のも、どれもこれも皆暗号だ。わたしは彼等のの中から、そっくりそのままの毒を出し、そっくりそのままの刀を出す、彼等の牙は生白（なまじろ）く光って、これこそ本当に人食いの道具だ。どう考えても乃公は人ではないが、古久先生の古面に蹶（けつまづ）いてからとても六（む）ツかしくなって来た。彼等は何か意を持っているようだが、わたしは全く推が出来ない。まして彼等がをそむけて乃公を人と言ひ布（ふ）らすんだからサッパリわからない。それで思い出したが、大アニキが乃公に文をかせてみたことがある。人物でいかなる好人物でもちよっとくさした句があると、彼はすぐに点（けんてん）をつける。人の口（あくこう）をくのがいいと思っているので、そういう句があると「翻天妙手（ほんてんみょうしゅ）、と同じからず」と誉め立てる。だから乃公には彼等の心が解るはずがない。まして彼等が人を食おうと思うなんかは。何（なん）に限らず研究すればだんだんわかって来るもので、昔から人は人をしょっちゅう食べている。わたしもそれを知らないのじゃないがハッキリえていないので史をけてみると、その史には年代がなく曲り歪んで、どのの上にも「仁道」というような文字がいてあった。ずっと睡（ねむ）らずに夜中までめていると、文字のからようやく文字がえ出して来た。本一ぱいにきめてあるのが「食人」の二字。このたくさんの文字は小作人がった四方山（よもやま）のだ。それが皆ゲラゲラ笑い出し、味のい目付で

わたしを。わたしもやっぱり人だ。彼等はわたしを食いたいと思っている。四朝、静坐（せいざ）していると、老五がをんで来た。野菜が一皿、蒸（むしうお）が一皿。このの眼玉は白くて硬く、口をぱくりとけて、それがちょうど人を食いたいと思っている人のようだ。箸をつけてみると、つるつるぬらぬらしてかしらん、人かしらん。そこではらわたぐるみそっくり吐き出した。「老五、アニキにそう言ってくれ。乃公はがくさくさして堪らんから庭内をこうと思う」老五は返事もせずに出て行ったが、すぐに来てをけた。わたしは身きもせずには彼等の手配を研究した。彼等は放すはずはない。果してアニキは一人のおやじを引って来てぶらぶらいて来た。彼の眼には味い光がち、わたしの看破りを恐れるように、ひたすらを下げて地に向い、眼の横べりからチラリとわたしを眺めた。アニキは言った。「お前、きょうはだいぶいいようだね」「はい」「きょうは何先生（かせんせい）に来ていただいたから、てもらいな」「ああそうですか」わたしはこのが首（くびきり）役であるのを知らずにいるものか。をるのをつけたりにして肉付を量り、その手柄で一分の肉の分配にあずかろうというのだ。乃公はもう恐れはしない。肉こそ食わぬが、胆魂（きもたま）はお前よりよっぽど太いぞ。二つの拳固を差出して彼がどんなに仕事をするかてやろう。は坐っているながら眼をじて、しばらくはさすってみたり、またぽかんと眺めてみたり、そうして鬼の眼玉を剥き出し「あんまりいろんな事を考えちゃいけません。静かにしているとじきに好くなります」フン、あんまりいろんな事を考えちゃ

いけません、静かにしていると肥りまさあ！彼等は余に食べるんだからいいようなものの乃公には何のいいことがある。じきに「好くなります」もないもんだ。この大の人は人を食おうと思って（かげ）になり（ひなた）になり、小盾になるべき方法を考えて、なかなか手取早く片付けてしまわない、本当にお笑草（わらいぐさ）だ。乃公は我慢しきれなくなって大声上げて笑い出し、すこぶる愉快になった。自分はよく知っている。この笑声の中には勇と正がある。とアニキは色を失った。乃公の勇と正のためにされたんだ。だがこの勇があるために彼等はますます乃公を食いたく思う。つまり勇に肖（あやか）りたいのだ。はを跨いで出るとくも行かぬうちに「早く食べてしまいましょう」と小声で言った。アニキは合点した。さてはお前が元なんだ。この一大は意外のようだがして意外ではない。仲を集めて乃公を食おうとするのは、とりもなおさず乃公のアニキだ。人を食うのは乃公のアニキだ！乃公は人食（ひとくい）の兄弟だ！乃公自身は人に食われるのだが、それでもやっぱり人食の兄弟だ！五この日のは一退いて考えてみた。たといあのが首役でなく、本当の医者であってもやはり人食人だ。彼等の祖李珍（りじちん）が作った「本草（ほんそう）何とか」をると人は煎じて食うべしと明かにいてある。彼はそれでも人肉を食わぬと言うことがき得ようか。家（うち）のアニキと来ては、全くそう言われても仕方がない。彼は本のをした、あの口からじかに「子（こ）を易（か）へて而（しか）して食（くら）ふ」と言ったことがある。また一度、偶然ある好からぬ者にしてをしたこと

がある。そののに、彼はされるのが当然で、まさにその肉を食(くら)いその皮に寝(い)ぬべしと言った。当わたしはまだ小さかったが、しばらくの胸がドキドキしていた。先日狼村(ろうそん)の小作人が来て、肝を食べたをすると、彼は格きもせずにえず首をり(うご)していた。そらたことか、おお根が残酷だ。「子(こ)を易(か)へて而(しか)して食(くら)ふ」がよいことなら、どんなものでも皆易(か)えられる。どんな人でも皆食い得られる。わたしは彼のを迂にいていたが、今あののことを考えてみると、彼の口端には人の脂がついていて、腹の中には人を食いたいと思う心がハチ切れるばかりだ。六真けのけで、昼かしらん夜かしらん。家の犬が哭き出しやがる。子に似た心、の怯懦(きょうだ)、狐狸(こり)の狡猾.....

100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细请访问
www.100test.com